

## 聖霊降臨の主日

盧 熙喆 神父

2008年5月11日(日)

### 聖霊降臨《希望に向い、希望のうちに》

ある刑務所にいる人は、私が訪問するといつも笑顔で迎えてくれます。その人が出所できるまでには、あと20年以上もあるのです。その人の年齢を考えてみますと、60歳以上にならないと社会に復帰できないのです。それにも係わらず、その人はいつも希望に満たされています。彼は私に「出所したら、それからは良いことだけをして、社会に貢献します」と言いました。そこで、私はその人が持っている希望とはどんなものか、と考えてみました。彼のまだこれから先の服役期間を考えると、希望どころか、絶望に陥るのではないかと思います。しかし、その人は、これから先20年の生活を考えるのではなく、その20年後に来る生活を考えているのです。つまり出所するまでのことを考えず、出所後のことを考えているので、希望に満ちているのではないかと思います。

今日は、復活されたイエス様が、弟子たちに息を吹きかけられて、聖霊を送ってくださったのを記念する《聖霊降臨》の日です。

イエス様は、弟子たちに「父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす」と言われます。イエス様は、これまではご自分が、神様のご意志に従って宣教活動をなさいましたが、これからはその役割を、弟子たちにお委ねになるということを言われています。

イエス様は全世界に行って、“よい知らせ”を伝えるようにと告げられた弟子たちに、聖霊を遣わして力づけられます。

では、弟子たちは何を世界中の人々に宣べ伝えるのでしょうか？ 彼等が人々に伝えることは、「イエス様は亡くなられたが、三日後に復活された」ことなのです。つまり、イエス様を信じることによって、私達も永遠に生きられるという喜びを伝えるのです。しかし、その“復活”という言葉は、私達人間にはあまり理解できない感じがするのではないかと思います。

先程話した刑務所にいる人にとって、刑務所の生活は決して生やさしいものではないと思います。そこでの生活は、自由もなく、いつも監視されて不便なことばかりだろうと思います。それにも係わらず、その人が今送っている、縛られた生活の大変さより、その後に来る自由な時間、自由な生活を考えて日々を過ごしているのは、本当に素晴らしいことです。そこに“希望”という言葉が無ければ、待つことが出来ない生活だと思います。

これから、私達は自分がイエス様に出会って、得られた大きな希望を人々に伝えられればと思います。私達の希望は、目先の事ばかり見たり考えるのではなく、目をもっと広く遠い未来に向けて、その未来にある限りない喜びの内で、未来を考えることです。ですから、私達は私達が持っている、その希望を周りの人々に伝えて、全ての人達が、希望のうちに暮らせるようになればと思います。

しばらく、私達はどこで、その希望を見いだせるのか考えてみましょう。